

わが国における母乳育児を行う母親の体験に関する文献検討

山田 志枝¹⁾、塩野 悦子¹⁾

キーワード：母乳育児、母親、体験、文献検討

要 旨

母乳育児を行う母親の体験の心理的特徴を明らかにし、必要な母乳育児支援を検討することを目的に、過去10年間の国内の文献検討を行った。医学中央雑誌WEB版によって検索された文献のうち、母乳育児を行う母親の体験に着目した7論文について、分析を行った。

その結果、母親は妊娠中には母乳育児に対する希望と自信のなさを持っており、入院中から試行錯誤を繰り返しながら、自分なりの授乳と母乳育児の意味を見出していた。そのことから、母親の試行錯誤を支えるかかわりと継続的な看護支援の重要性が示唆された。

Literature Study on Mothers' Experience of Breast-Feeding in Japan

Yukie Yamada¹⁾, Etsuko Shiono¹⁾

Key words : breast-feeding, mother, experience, literature study

Abstract :

We studied domestic literature of the past ten years in order to illustrate the psychological characteristics of mothers who have experienced breast-feeding and consider necessary support for breast-feeding in infancy. We analyzed seven research papers focused on the mothers' experiences which were sourced from the website of the Japan Central Medical Journal (Japana Centra Revuo Medicina).

As a result, it seems that pregnant mothers have confidence in their breast-feeding abilities and have to learn by trial and error from the moment of hospitalization. This confirms the importance of involvement and continuous support during the mothers' period of trial and error.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University, School of Nursing)

I. 緒 言

現在、母乳育児のさまざまな利点が見直され、妊産婦ならびに医療者の母乳育児への関心が高まっている。1989年にユニセフ/WHOは、母乳育児を支援するために産科医療の関係者が取りうる実践的な手段として「母乳育児成功のための10カ条」を提唱しているが、これに沿った母乳育児支援を行う施設である“赤ちゃんにやさしい病院” Baby Friendly Hospital（以後BFHと記す）が増加している。また、母乳育児を成功させるために必要な、一定水準以上の技術・知識・心構えを持つヘルスケア提供者である“国際認定ラクテーション・コンサルタント”の資格取得者も増えている。

しかし、日本では約90%の母親が母乳育児を希望しているものの、産後1～2カ月の母乳育児率は40%程度、さらに産後6カ月には30%に低下している現状がある³⁾。多くの女性は、出産すれば当然母乳が出るものと思いがちだが、出産直後からの頻回授乳や乳頭亀裂による苦痛などの身体的な要因、退院後の母乳不足感や周囲の人工乳の勧めなどの心理社会的要因などによって、母親は母乳だけで子どもを育てられないかもしれないという予測や不安を抱きやすい。そのため、カウンセリング技術を用いたエモーションサポートも重要とされてきている⁴⁾。

また近年、質的帰納的方法を用いた看護研究が増えており、母乳育児を行う母親の体験に焦点を当てた質的研究も多くなってきている。母親の母乳育児に関する体験の語りが明らかにされることは、より母親の気持ちに沿った、個別的な支援につながるものと考えられる。

そこで本研究では、質的帰納的方法を用いた母乳育児を行う母親の体験に関する看護研究の文献検討を行い、その心理的特徴を明らかにし、必要な母乳育児支援を検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 文献の検索方法

医学中央雑誌WEB (Ver. 4) を用いて、2000年から2010年までの過去10年間において「母乳育児」、「母親」、「体験」をキーワードに用い、原著

論文を抽出した。この条件により抽出された文献は21論文であった。これらの文献についてAbstractを読み、そのうち母乳育児を行う母親の授乳の体験に着目した7論文を分析対象とした。

2. 分析方法

対象文献ごとに、調査方法と研究対象、調査を行った時期を抽出し、体験の内容から母親の心理的特徴に着目して整理し、分析した。

III. 結 果

母乳育児を行う母親の体験を明らかにした7文献について^{5)~11)}、各論文における研究目的、対象者および分析対象時期を行った時期、内容（妊娠期・産後・看護への示唆）について表1に示した。

1. 対象者の特徴

対象論文の対象者は、5文献が初産婦、2文献が初産婦と経産婦であった。対象論文の研究協力施設は5文献が総合病院、2文献が助産所であり、総合病院のうちBFH認定施設およびそれに準じた施設が3文献であった。

2. 調査時期

対象文献の調査時期は、生後2～5日目（1文献）、妊娠期から産後1カ月（1文献）、産後2か月（1文献）、産後3カ月（2文献）、産後6か月（1文献）、産後1年（1文献）であった。

3. 母乳育児を行う母親の心理的特徴と母乳育児支援について

各論文における、母乳育児を行う母親の心理的特徴の概要と看護への示唆を以下にまとめた。

道谷内ら⁵⁾は、初産婦6名に対して、妊娠中から産後1カ月までの母乳育児に対する母親の思いの変化を明らかにしている。その結果、妊娠期では、【母乳育児を望む思いと授乳へ漠然としたイメージ】、出産から退院までの間では、【母乳育児の困難感と自信の芽生え】、退院後から1ヶ月健診までは【自分なりの母乳育児確立による満足感】のように母乳育児への思いが変化していたことを報告している。とくに産後入院中は、うまく吸着させようと必死に取り組むものの、授乳が順調に

表1 母親の母乳育児体験に関する文献一覧 (2000~2010)

研究者	研究目的	対象者： 支援を受けた施設	分析対象 時期	妊娠期	産後	看護への示唆	
1 道谷内 他 (2010)	母親の母乳育児に対する思いの変化	初産婦6名： 病院	妊娠期～ 産後1ヵ月	妊娠期 【母乳育児を望む思いと授乳に対する漠然としたイメージ】 〈母乳育児への強い希望〉 〈授乳に対する漠然としたイメージ〉	出産から退院まで 【母乳育児の困難感と自信の芽生え】 〈赤ちゃんと共に必死に取組む授乳への意欲〉 〈産褥に落ち込む愛着が生れる授乳への意欲〉 〈予想以上に順調に授乳できた安心感〉 〈順調に授乳が進まないことによる困難感〉 〈吸着の上達と分泌増加に伴う意欲の増進〉 〈退院を意図した授乳への自信と自立の芽生え〉 〈自立して授乳を行っているかという予期的不安〉	退院から1ヵ月健診まで 【自分なりの母乳育児確立による満足感】 〈母乳栄養確立への困難感による人工栄養への気持ちの揺れ〉 〈自分なりに母乳栄養を継続している満足感〉	母親の心理を理解し、エモーショナルサポートの充実を図る必要がある。母親が望む母乳育児について理解し、目的を共有しながら方法を模索していくことが重要である。
2 服部他 (2009)	母乳育児の意味を明らかにすること	25名 (初産婦14名、 経産婦11名)： B H F 病院	産後1年	妊娠中に役立った指導 (病院からの母乳情報) (乳房の手入れの方法) (母乳の利点の説明) (自信をつけさせる励まし) (病院と友達からの情報) (いろいろな人から情報を得た)	【母乳で育てたことの意味】 ・からだを直接触れ合うことで愛情が深まる ・一緒にいる時間が長いことで子どもとの関係が深まる ・自分の力で育てた満足感・有能感 ・幸福感・楽しい ・楽にできる	入院中に役立った支援 【頻回授乳のすすめ】 【直接的な授乳方法の指導】 【何度も見に来てくれること】 【出産直後の授乳体験】 【気持ちを支え励ますかかわり】 【家族への支援】 退院してから困ったこと (どれだけ飲んでいるのかわからない) (乳頭亀裂や傷) (母乳不足感) など	妊娠中から母乳の利点や乳房乳頭のケアの方法などを繰り返し指導し、母乳で育てられそうなイメージを育てたり母乳育児への意欲を引き出す支援が重要である。また母親の気持ちを支え、励ますとともに、周囲の理解が得られるように、退院後の家族への働きかけとグループ作りなどの地域での支援が必要である。
3 笹野他 (2008)	母乳継続体験(3ヶ月)の過程・母乳哺育継続パターン	初産婦15名： 病院	産後3ヵ月	母乳継続体験の過程 【自然で母親の務めとしての母乳哺育】 【疲労の中にあひながらの授乳能力の獲得】 【子どもに自分が必要な存在である自覚】 【母乳充足に対する自己判断】 【医療者の判断に基づく母親としての価値づけ】 【児の成長への一言一響】 【母親としての覚悟】 【不自由と工夫】 【子どもを中心とした生活変更の体験】 【育児サポートの欲求】 【母乳充足への焦りと過希求】 【緊張と翻弄】		退院後早期に母親が支えられるように、妊娠中からの支援体制整備への指導と、母乳哺育を支える専門職者の技術とエモーショナルサポートやピアグループ作りの支援が重要である。	
4 井上他 (2008)	母乳育児確立した母親の体験	15名 (初産婦10名、 経産婦5名)： 助産院	産後2ヵ月	〈母乳育児への希望〉 〈なんともなく母乳で育てたい〉 〈やっぱり母乳で育てたい〉 〈このまま母乳で育てたい〉 〈母乳の魅力〉 〈イメージの中での良さ〉 〈体験の中での良さ〉 〈赤ちゃんとのつながりを感じる良さ〉	〈周囲のかかわり〉 〈母親を理解しない〉 〈母乳の魅力を打ち消す〉 〈母親に寄り添う〉 〈母乳の魅力を感ぜさせる〉 〈母乳量に影響される心と体〉 〈母乳は自然に出るもの〉 〈母乳が出ないというつらいもの〉 〈母乳が出るといううれしいもの〉	母親が〈母乳が出ないというつらいもの〉と認識した時点で、共感的姿勢をとり、つらかった気持ちを理解し、共感、応援する情緒的なケアと、マッサージで乳房を良い状態に導き、育児技術を助言するような技術的なケアが必要である。	
5 柏原他 (2006)	早期新生児の哺乳行動に対する母親の体験の変化	初産婦と その児 9組	生後 2～5日目	早期新生児の哺乳行動に対する母親の体験の分類 ・出産後初期から成功体験が得られ母乳哺育継続への自信の体験となる ・試行錯誤により自力で成功体験を得て、母乳哺育継続への自信の体験となる ・助産師の援助や児の哺乳力増強により、産後4日以降に成功体験を得て母乳哺育継続への自信の体験となる ・母乳分泌不良で母乳哺育の成功体験が得られないまま授乳を繰り返す体験となる	適切な哺乳行動 【明らかな哺乳欲求】 【深い位置で続く吸吸】 【哺乳後に寝ている】 不適切な哺乳行動 【哺乳欲求の鎮静】 【興奮】 【哺乳中に寝ている】 【口をあけて吸着しない】 【少しか吸吸する】 【陰圧のかからない吸吸】	1) 生後2, 3日目には、母親の間で繰り返される試行錯誤に支持的な態度で見守り、早期に母乳哺育における成功体験を得られるよう支援する。 2) 適切な哺乳行動に対する母親の的確な知覚・解釈や行動を承認・強化し、予期的な判断や行動力を自信の体験へとつながるように支援する。 3) 不適切な哺乳行動に対しては、心情を理解し、寄り添いながら的確に知覚・解釈、行動できるように支援する。 4) 分泌不良で成功体験が得られない母親には、否定的な知覚・解釈に共感を示し、母親が喪失感を自然に悼めるよう支援する。	
6 土江田 (2005)	自分なりの授乳を子どものかかわりから見ていく母親の体験	初産婦4名： 助産院	産後 3ヵ月	ケースごとの特徴 A：「子どもにとっては精神安定剤の役割があり、ハイハイ最終兵器だとわかる」 B：「いつでもおっぱいに吸いついてきてくれる以上は、やっぱり与えたいと感じる」 C：「母子お互いがうまくいくためには、おっぱいが飲みたい、おっぱいをあげたいという二人のバランスが大切と気づく」 D：「子どもにとっては生きることであり、自分の精神的なものを大きく占めると感じる」	テーマ 1) 「子どもの反応の意図を探る」 2) 「子どもの反応を受け取り試行錯誤する」 3) 「子どもからのフィードバックに支えられる」 母親たちは、それぞれに授乳の困難感乗り越えようと試行錯誤する体験がみられたが、それを子どもとの日々のかかわりの中において乗り越える糸口を見つけ、子どもからさまざまなフィードバックを得ながら、自分なりの授乳を見いだしていくという体験	母親が子どもに集中できる環境を整え、授乳の方法を指示するだけでなく、母子相互のやりとりを尊重し、母親が子どもの反応を見ながら自分の授乳を見出し、見守り、支えていくケアが必要である。	
7 渡邊他 (2005)	母乳哺育を6ヶ月継続した母親の体験	初産婦18名： B H F 病院	産後 6ヵ月	【赤ちゃんとの関係形成】 〈赤ちゃんと共にある自己愛〉 ・〈赤ちゃんの心地よい反応を見る喜び〉 ・〈赤ちゃんが健康に育つ喜び〉 ・〈唯一無二の存在である喜び〉 ・〈赤ちゃんに慣れなく与えられる喜び〉 ・〈おっぱいが好きな赤ちゃんへの同一化〉 〈授乳時の母子一体感〉 〈授乳による母親自身の安寧〉 【生理的絆】 〈自分の母乳で育つ生命への畏敬〉 〈赤ちゃんとの生体リズムの同期の実感〉 【赤ちゃんとの緊張関係】 ・〈唯一無二の存在としての責任〉 ・〈赤ちゃんの要求にこたえられない辛さ〉 ・〈母乳状態保全のための赤ちゃんへの吸吸の欲求〉 ・〈赤ちゃんに対する支配感〉	【母乳分泌への敏感さ】 〈母乳分泌量がわからないことへの不安〉 〈母乳分泌不良による自責感〉 〈母乳分泌に対する自信〉 【自己の快・不快】 【女性としての快】 ・〈女性生理が機能する満足〉 ・〈瘦身願望との符合〉 【ナルチズム】 ・〈身体の痛み〉 ・〈母乳中絶への罪悪感〉 ・〈母乳哺育欲求への追求〉 【母乳哺育の特徴と環境】 ・〈母乳の利便性に基づく楽〉 ・〈羞恥に基づく授乳の制約〉 【専門家や家族によるサポート】 ・〈母乳哺育の世代間伝達〉 ・〈専門家からの支援〉 ・〈家族からの保護や意向〉	知識と信念に裏付けられ、母親の個別性をアセスメントしたうえで、声かけや技術的支援が必要である。 〈赤ちゃんと共にある自己愛〉を持つことができず、〈赤ちゃんとの緊張関係〉が目立つ母親や、妻母からのサポートが受けられないことがわかっている母親には、母親の関係性への支援が必要である。 家族からの支援は、母乳哺育継続に影響を与えることから、家族全体をアセスメントし、支援していくことが必要である。	

進まない困難感、自立して授乳できるかの予期的不安という困難感を抱くが、疼痛に勝る児への愛着を感じ、予想以上に上手く授乳ができたことに安心したり、吸着の上達や分泌増加に伴う授乳への意欲を増進させていた。退院後は、自分なりの母乳育児ができるようになるものの、人工栄養への気持ちの揺れも感じていた。そのことから、母親の心理を理解し、エモーションサポートの充実を図る重要性を述べている。

服部ら⁶⁾は、BFHで母乳育児を体験した母親25名(初産婦14名、経産婦11名)を対象に半構成的面接を行い、母親にとっての母乳育児の意味を【からだを直接触れ合うことにより愛情が深まる】、【一緒にいられる時間が長いことで子どもとの関係が深まる】、【自分の力で育てた満足感と有能感】、【幸福感や楽しさ】、【楽にできる】の5つに分類している。そして母乳育児の体験から、母乳育児の楽しさや利点、自分の力で育てた満足感と有能感を感じ、これにより生じた母親の気持ちのゆとりが、母子関係を深めていく基盤になると述べている。そのほか妊娠中に役立った指導は〈乳房の手入れの方法〉・〈母乳の利点の説明〉・〈自信をつけさせる励まし〉などであり、入院中に役立った支援は、【頻回授乳のすすめ】・【直接的な授乳方法の指導】・【何度も見に来てくれること】・【出産直後の授乳体験】・【気持ちを支え励ます関わり】・【家族の支援】があったと報告している。退院してから困ったことには、〈どれだけ飲んでいるのかわからない〉・〈乳頭亀裂や傷〉・〈母乳不足感〉などを挙げている。

笹野ら⁷⁾は、産後3ヶ月の初産婦15名を対象として面接を行い、【自然で母親の務めとしての母乳哺育の位置づけ】、【疲労の中にありながらの授乳能力の獲得】、【子どもにとって自分が必要な存在であるという自覚】、【母乳充足に対する自己判断】、【医療者の判断に基づく母親としての価値づけ】、【児の成長への一喜一憂】、【母親としての覚悟】、【不自由と工夫】、【子どもを中心とした生活変更の体験】、【育児サポートの欲求】、【母乳充足への焦りと過希求】、【緊張と翻弄】の12カテゴリーを分類している。さらに母親の母乳哺育の継続パターンの分類を行っており、安定型パターン・サ

ポート安定型パターン・不安定型パターン・分泌不足感ストレスパターンがあることを報告している。

井上ら⁸⁾は、産後2か月までの母親15名を対象に、自ら支援を求めて助産所を来院し、満足する母乳育児が確立した母親の体験について明らかにしている。その結果、母乳育児確立の過程において、【母乳育児への希望】、【母乳の魅力】、【周囲のかかわり】、【母乳量に影響される心と体】の4つのカテゴリーが相互に関連していたと報告している。そのことから、母乳育児を確立していくためには、共感や励ましなどの母親に寄り添う情緒的なケアとともに、乳房の状態を整え、育児技術を助言するような技術的なケアが重要であると述べている。

柏原ら⁹⁾は、生後2～5日目の早期新生児の哺乳行動に対する母親の体験の変化を明らかにしている。方法はビデオ撮影と母親の半構成的面接法であったが、その結果、児は生後2～5日目の間で適切な哺乳行動と不適切な哺乳行動を示していた。母親は適切な吸啜行動を引き出すように授乳行動を繰り返すことで、授乳の成功体験を経験し、状況に応じて助産師に援助を求め、児の深く持続する吸啜という成功体験を繰り返していた。そして母親が成功体験を繰り返すと、母乳哺育継続への自信の体験が導かれたと述べている。また、哺乳行動に対する母親の体験は、出産後初期から成功体験したもの、生後2日目まで不適切な哺乳行動があったが、母親が自力で試行錯誤して成功体験を得たもの、生後2～3日目まで不適切な哺乳行動があったが、助産師の援助や児の哺乳力増強によって、産後4日以降に成功体験をしたもの、産後5日まで母乳分泌不良で成功体験が得られないまま授乳を繰り返したものという4つに分類できたことを報告している。看護への示唆としては、母子の間で繰返される試行錯誤を支持的な態度で見守り、早期に母親が母乳の成功体験を得られるような支援が必要であることを強調している。

土江田¹⁰⁾は、助産院で出産した初産婦4名を対象として、産後3か月までの母親が自分なりの授乳を子どもとのかかわりから見出していく授乳体験を記述している。その結果、母親たちはそれぞれ

れに母乳分泌不足感や乳房トラブルなどの授乳の困難感を乗り越えようと試行錯誤する体験がみられたが、子どもとの日々のかかわりの中から、それを乗り越える糸口を見つけ、子どもからさまざまなフィードバックを得ながら自分なりの授乳を見いだしていくという体験をしていたと述べている。そのことから、母親が子どもに集中できる環境を整え、授乳方法を指示するだけでなく、母子相互のやりとりを尊重し、母親が子どもの反応を見ながら自分なりの授乳を見いだしていけるようにケアしていくことを示唆している。

渡邊ら¹¹⁾は、産後6ヶ月時点で母乳哺育を継続していた母親18名を対象に、産前の母乳哺育に対する意思と、産後の母乳哺育をめぐる体験を明らかにしている。産前の意思には、強固な意志・可能な限り希望・出ないとの思い込み・明確に意識化しない状態の4つがあったが、いずれにおいても母乳分泌への自信の無さがみられていた。また産後の母乳哺育をめぐる体験として、【赤ちゃんとの関係形成】・【母乳分泌への敏感さ】・【自己の快/不快】のカテゴリーを抽出している。【赤ちゃんとの関係形成】とは、母親と児の心身の関係性をめぐる体験をいい、赤ちゃんと共にある自己愛・生理的絆・赤ちゃんとの緊張関係のサブカテゴリーから成っており、「満足そうに飲んでいると私も嬉しい気持ちになる」、「自分がいなくてどうしようもない」、「おっぱいあげているときはなんかいい時間だな」などの逐語が紹介されている。【母乳分泌への敏感さ】とは、母親が母乳分泌量の多少に非常に敏感であり、これによって不安や自責感を覚えたり、自尊感情を高めたりしていることである。【自己の快/不快】とは、母親自身の欲求に基づいた満足や不満足の状態であり、「女だからできる」、「もう、育児の辛さは母乳の辛さとイコールでしたね」、「おっぱいが出ればなんか便利だし、単純に楽だっという」などの逐語が紹介されている。さらに、母乳哺育の世代間伝達・専門家からの支援・家族からの保護や意向から成る【専門家や家族によるサポート】が母乳継続に大きく影響し、促進したり阻害したりするものであると述べている。そのことから、母乳育児の継続を促進するために、母子の関係性や家族全体を支援してい

くことの必要性を述べている。

IV. 考 察

本研究では、母親の母乳育児体験に関する7文献から母親の母乳育児体験の特徴と看護への示唆を整理するに至った。

対象者は7文献のうち5文献が初産婦で、2文献が初産婦と経産婦の両方を対象としていた。初産婦のみを対象とする理由は、初めての母乳育児に対する戸惑いや不安が大きいことが推測される。しかし経産婦も対象に含む場合、上の子に対してうまく母乳育児で育てることのできなかった経産婦は罪悪感や喪失感、不安や悲しみなどの様々な感情を持っていることを本郷が報告¹²⁾していることから、前回人工栄養による授乳を行った経産婦が初めて母乳育児を行う際には、全く異なった体験となることが予測できる。そのため、母乳育児の体験に関する質的研究の対象者の選定には、考慮が必要である。

また期間では、妊娠期を含むもの、産後においては生後2～5日のものから、産後1年間のものまで幅広かったが、妊娠中、産後入院中、退院後のそれぞれの特徴について以下に考察する。

まず妊娠期における母乳育児に関する体験として特徴的であったのは『自信の無さ』と『漠然としたイメージ』である。道谷内ら⁵⁾は、妊娠期には母親が持つ母乳育児のイメージは漠然としていたり、自信の無さを感じていると述べており、渡邊ら¹¹⁾も産前の母乳哺育に対する意思には常に母乳分泌への自信の無さが共存していたと述べている。そのため、妊娠中から母乳育児のイメージをもてるような支援が必要である。また研究協力施設がBFH認定病院の場合、妊娠中から母乳育児の情報提供が行われており、服部ら⁶⁾は妊娠中に病院からの情報が役立ったことを明らかにしている。これは「母乳育児成功のための10カ条」の第3条「すべての妊婦に母乳育児の利点と授乳の方法を教える」¹⁾に基づいた支援であり、渡辺¹³⁾は、母乳育児は学習を必要とすることから、妊娠中からの具体的な情報提供が必要であると述べている。さらに母乳育児に関して豊かな知識を持っていることは母乳育児の継続を支えるといわれてい

ることから¹⁴⁾、母乳育児が具体的にイメージできるような出産前教育が重要である。

産後入院中の数日間の母乳育児体験を取り上げているのは、3文献(道谷内ら⁵⁾ 服部ら⁶⁾ 柏原ら⁹⁾)であった。これらの文献から、授乳開始直後は、児がうまく吸着しないことの乳頭痛などの『困難感』を経験する。母親はそれに対し、何度も乳頭を児にくわえさせたり、児の口唇を何度もつつくなどの『試行錯誤』を繰り返しながら授乳を行っている。しかし、徐々に深い位置で続く吸啜の感覚をつかみ、哺乳後の児の満足げな様子から、少しずつ『成功体験』を積み重ねていく。そこから『児の欲求を満たせられる喜び』を感じ、『母親としての自信』が芽生えていくという体験が共通して読み取れる。さらに母親は児とのやりとりのなかで『児の哺乳行動に合わせた授乳』を体得していくことから、個人差はあるものの、これらの体験を理解して母乳育児を支援することが重要である。また産褥早期は、産後の疲労のなかでの頻回授乳を行わなければならない、マタニティブルーのような精神的変化が起きやすい時期である¹⁵⁾。そのことから、入院中には、授乳がうまくできるように直接手伝うことなどの技術的な支援とともに、母親の試行錯誤を支えるような情緒的な支援が重要である。

退院後は、母乳不足感、乳房トラブル、生活への不自由さ、さらに周囲からの矛盾した助言などの『困難感』を経験し、それとともに『試行錯誤』は続けられている。しかし土江田¹⁰⁾が述べるように、母親は子どもとのやりとりの中で『自分なりの母乳育児』を見出し、『母親としての喜びや楽しさ』を体験する。そのことから、退院後もこの試行錯誤を支え、母親が子どもの反応を見ながら自分なりの授乳を見出していけるような、継続的な支援が必要である。

さらに母乳育児の継続には、渡邊ら¹¹⁾や井上ら⁸⁾が明らかにしているように、周囲のかかわりが重要な鍵を握ると考えられる。そのため、母親をサポートする家族に対しても母乳育児を継続する意義や方法を十分に伝えていくなど、家族を含めた支援が重要である。

本研究において、母親の母乳育児の体験に関す

る質的研究の文献検討として文献数が少ないため、十分に検討できたとは言えない。しかし、母親の希望に沿うためには、その母子に合った個別的なケアが大切であり、母親の語りを記述的に明らかにする質的研究方法を使用していくことは有用であると考えられる。母乳育児支援を行う際には、技術だけでなく、母親の気持ちに常に関心をもつことが大切である。

V. 結 論

過去10年の母乳育児を行う母親の体験に関する7文献から、母親の母乳育児体験についてまとめ、その支援について示唆を得た。

- 1) 妊娠中は『自信のなさ』や『漠然としたイメージ』があることから、母乳育児を具体的にイメージできるような出産前教育が重要である。
- 2) 入院中の母親は、『困難感』と『試行錯誤』を繰り返すが、『成功体験』、『児の欲求を満たせられる喜び』、『児の哺乳行動に合わせた授乳』によって『母親としての自信の芽生え』を体験する。この試行錯誤を支え、母親が成功体験を得られるような、技術的支援と情緒的支援が必要である。
- 3) 退院後も特有の困難感と試行錯誤は続くものの、『自分なりの母乳育児』を見出し、喜びと楽しさを体験する。そのため、母親が子どもの反応を見ながら自分なりの授乳を見出していけるような、継続的な支援が必要である。

【引用文献】

- 1) WHO・ユニセフ：母乳育児成功のために・10か条解説本. pp. 52、日本母乳の会、2002
- 2) 日本母乳の会：赤ちゃんにやさしい病院 BabyFriendlyHospital (BFH) について. 2010 日本母乳の会ホームページ2010年11月12日 <<http://www.bonyu.or.jp/index.asp>>
- 3) 財団法人母子衛生研究会編集：母子保健の主な統計 平成21年度刊行. pp. 133、母子保健事業団、2009
- 4) 横尾京子責任編集：助産師基礎教育テキスト、pp90-98、日本看護協会出版会(東京)、2009
- 5) 道谷内美佳、宿野智恵、出口綾子、他：母乳

- 育児に対する母親の思いの変化と背景の探索授乳前後の体験分析から. 日本看護学会論文集母性看護 (40) : 87-89、2010
- 6) 服部律子、布原佳奈、名和文香、他：赤ちゃんにやさしい病院で母乳育児を体験した母親にとっての母乳育児の意味. 岐阜県立看護大学紀要、9 (2) : 27-33、2009
- 7) 笹野京子、坂井明美：3ヵ月間母乳哺育を継続した初産婦の体験. 金沢大学つるま保健学会誌、32 (2) : 1-12、2008
- 8) 井上友里、久米美代子：母乳育児に対する母親の認識 満足する母乳育児が確立するまでの原動力：日本ウーマンズヘルス学会誌 (7) : 57-66、2008
- 9) 柏原英子、森 恵美：早期新生児の哺乳行動に対する母親の体験の変化. 日本母性看護学会誌、6 (1) : 1-8、2006
- 10) 土江田奈留美：出産後3ヵ月間の授乳の体験 子どもとのかかわりの中で自分なりの授乳を見いだしていくプロセス. 日本助産学会誌、19 (2) : 9-18、2005
- 11) 渡邊久美、上別府圭子：母乳哺育を6ヵ月間継続した母親の体験 Baby-Friendly-Hospitalにおけるインタビュー調査から. 小児保健研究、64 (1) : 65-72. 2005
- 12) 本郷寛子：1人目の母乳育児がうまくいかなかった経験を持つ母親への援助、母乳育児支援スタンダード. NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編集、pp. 60-66、医学書院 (東京)、2007
- 13) 渡辺和香：母乳育児のための出産前教育、母乳育児支援スタンダード. NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編集、pp. 140-146、医学書院(東京)、2007
- 14) PageLA著、鈴木江三子監訳：新助産学. pp. 396-398、メディカ出版 (大阪)、2002
- 15) 松岡恵編著：やさしく学ぶ看護学母性看護学 (3版). pp. 175、日総研 (名古屋)、2007